
あの時つまずいたせいだ。

猫舌なネズミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時つまりたせいだ。

【Nコード】

N9882Z

【作者名】

猫舌なネズミ

【あらすじ】

私立朱雀台高校に通っている運がいいことが取り柄の一年生の少年、南条 広夢はある日の学校の帰りにつまずいてしまう。そして、顔を上げるとそこには、美少女がいた。

美少女は何と、異世界から来たらしい。その目的は、花嫁修行だそうだ。

そこから始まった少年のドタバタ非日常的物語。

其の一 始まり

文武両道 日々精進 切磋琢磨

などの謳い文句が、私立朱雀台高校には掲げられている。この学校は創立百五年の由緒ある高校で、全学年合わせて千二百人くらいの生徒がいる。また、この高校はこの高校がある朝ぼらけ市の四大私立高校と言われている高校のひとつで、四大私立高校には他に、玄武台高校、青龍台学園高校、白虎台高校がある。

今、朱雀台高校の一年三組の教室に、一人の男子生徒がいる。

「そろそろ帰るか。」

彼は、こうつぶやくと教室から出た。教室は、穏やかな春の夕日の色に染まっている。

彼の名前は、南条 広夢、今年の四月にここ、朱雀台高校に入学した。高校生活が始まってもう一ヶ月くらい経つが、部活には入っていない。彼はこうしてよく、放課後の誰もいなかった教室に一人でいることが多い。

広夢は、帰り道、途中にある『なんでもマート』というコンビニエンスストアによることにした。

コンビニに入ると、広夢以外、店員の他には誰もいない。

（まあ、いつも通りだな。）

広夢がこう思ったのは、ここ最近、このコンビニの近くにスーパーマーケットが出来、買い物客がそっちの方へ行くようになったからである。広夢は、ここに買い物をしに来たのではない、ただトイレに行きたかったからである。彼は実は四時間くらいトイレを我慢していて、一時、忘れていたが、思い出したのでトイレに行くことにしたのだ。

広夢は、さっさと目的を達成して、コンビニから出た。広夢はいつもと同じ道をいつものように歩いている。しかし、それは、ふと、彼がいつものように郵便局の前の角を曲がろうとした時だった。彼は何故か、今日は反対方向に曲がってみようという思いにとらわれた。そして、彼はその欲求のままに反対方向へと曲がった。

広夢は、こちらのほうの道には来たことがない。そのためか、彼の心はワクワクした、まるで生まれて初めて外に出た子供のような感情でいっぱいだった。

しばらく歩いていると、自動販売機を見つけた。しかも、一機ではなく、十機もだ。

（こんなに密集してる意味、あんのかよ。まあ、仕方ねえか

らひとつ、コーヒーでも買ってやるか。)

広夢はちょうど、喉が渴いていたので、一番安い百円のコーヒーを買ってゆつくりと飲んだ。

そうしているうちにだんだん日が暮れてきた。

(さてと、寄り道したし帰ろうか。ところで、今何時だろう。)

広夢は、ポケットから、この春に親に買ってもらったスマートフォンを取り出した。

(五時十二分、やべえ、もうあれが始まってる。早く帰らないと。)

あれとは広夢がいつも見ているアニメのことである。

広夢は急いで今来た道を走っている。そして、郵便局の前を走り抜け家まであと三百メートルくらいのところ。生憎、広夢はつまづいてしまった。

(痛い、でも急がねえとアニメが終わっちゃう。)

広夢が立ち上がろうとしたそのときだった。

「大丈夫ですか。」

不意に声がした。

（誰だろう、世の中には、優しい人がいるんだなあ。）

今まで自分がつまずいて、声を掛けられたことのなかった広夢はこう思いながら顔を上げた。

「天使？」

広夢は顔を上げたとき、思わず声を出してしまった。

其の二 逃げるときは前を見よ。

なんて美少女なんだと広夢は思った、一瞬天使にさえ見えただのである。

「怪我はありませんか。」

美少女は美しくも可愛らしい声で言い、広夢に手を差し伸べた。

（ああ、なんて幸せな気分なんだ。しかも、手を差し伸べてくれるなんて。おかげで、心臓がバクバクし出したじゃねえか。）

今、広夢は極楽浄土にいるようなきぶんである。何せ、広夢はこのような美少女と手をつなぐのは初めてであるからだ。

（本当にいいのかなあ。まさか、こんな美少女と手をつなげるとは、思ってもみなかったぜい。）

広夢は、差し伸べられた手をつかみ、持ち上げられると共に、起き上がった。

「ありがとう。」

広夢は、興奮を押さえつつ、クールな雰囲気を使いながら言っただ。

広夢は、立ち上がって彼女を見てみると自分より背が小さいことがわかった。

広夢の身長はだいたい百七十センチメートルくらいだから、少女は百六十センチメートルくらいだろうか。そんな、彼女を見ていた広夢はある大切なことを思い出した。

（いけねえ、俺は確か家に急いでかえらなくちゃいけないんだ。この子には、悪いけど、グズグズしてられるか。）

「悪いけど、俺、今日急いでるんだ。本当にありがとうな。」

そして、広夢が走り出そうとしたそのときだった、少女が広夢の腕をつかんだのは。

「待つて、せめて自己紹介だけでもさせて。」

（にやんですって、こんな美少女に手を差し伸べられた上に、自己紹介をさせてとは。こんなハッピーイベント今まで俺にあったらうか、いやない、絶対ない！このチャンスを逃したら、もう一生こんなことはないかもしれない、だが、今日は見なくちゃいけないアニメがあるんだ。この子には悪いがこの辺でおさらばさせてもらうぜ。でもなかなか強く握られている。よし、こうなったらあの手を使うしかないか。）

広夢はそう決心すると、遠いところを指差してこう言った。

「おい、あれ、空に何か浮かんでるぞ！」

「えっ、どこ？」

彼女が振り向いた瞬間、広夢は握られた手の力が弱まったと

きを見逃さなかった。広夢はその手をやや強引に振り払い、逃走を試みる。

（まさか、こんな単純な手に引つかかってくれるなんて。んーっ、そこがまた、可愛いぜ。）

広夢はそう思ったとき、すでに彼は彼女の手から開放されていた。あとは逃げるだけだと決め、その一瞬の隙を見計らい彼はまるで、狭い水槽から大海原に解き放たれた魚のように逃げ出した。そのスピードは、広夢自身にも信じられないくらいの速さだ。

（このスピードで走れたら、鬼ごっこで誰にも負ける気がしねえ！でも、あんな美少女から必死に逃げるなんてちよつと馬鹿な気もするが、あのアニメのためなら仕方ないか。）

「どつして逃げるの…」

彼女はそうつぶやいた。もちろん、広夢にも彼女の声は聞こえたが、聞こえなかったことにすれば良いと決め込んで、そのまま走り続けている。

「どつして逃げるのってきいてんのよー！」

広夢の耳に、さつきよりも幾分荒く、大きな声が聞こえた。

（やべえ、やっぱ怒るよな、そりゃ怒るよな、あんな手ではめたんだから。）

広夢は振り向いてみると、彼女がものすごい勢いで追いかけてくるのを見た。

（恐え、ダッシュオバサンだ。何であんなに速く走れんだ。でも、女の子に追いかけてもらうのも、何かいい気分だあ。まあ、明らかにこの状況、危ねえけどな。）

広夢は何故かニヤニヤしている。そう、一言で表すならば変態だろう。だが、彼は、大切な点をひとつ見落としていた。

「ぎゃほふえん。」

彼はそんなへんてこりんな声を出して、またもや、つまずいてしまった。彼の目の前にあった道路の、アスファルトの凹みに気づかずに、しかも、哀れ、なんとタイミングの良いことだろうか、まんまと広夢は美しくさを感じさせるほど上手く、そこにはまったのだった。

（俺の人生終わったな。）

彼はそう感じた。

其三 目的

（くそっちゃんと前を見て逃げるんだった。）

「全く、自分から逃げて自分で勝つてにコケるなんて、あなた、救いようのないバカね。」

「うるせえ、たまには、こういうこともあるんだよ。」

「へー、こういうことかぁ。」

彼女は、意地悪そうに言った。

「ところで、初対面の俺にどうしてそこまで怒ってんの？一瞬、ダッシュオバサンかと思ったぜ。」

「痛え、何するんだよ。」

そのとき、広夢は頭に激痛が走るのを覚えた。

「オバサンとは失礼な！私はこれでも十五歳だよ！」

「へー、俺と一緒に歳のじゃん。意外だな。」

「意外で悪かったな。あと、私はあなたが自己紹介もさせてくれず、あんな、アホみたいな手ではめて、逃げ出したのにムカついてんのよ。」

（そりゃあ、ごもつともだ。ここは素直に謝っておこう。）

広夢は、瞬時に体勢を整えると、土下座した。

「本当に、すいませんでした。」

「あら、あなた案外潔いのね。」

（案外って、なんだよ。）

「おい、俺はいつでも潔いよいぞ。」

「嘘だ。」

「本当だ。」

「嘘だ。」

「本当だ。」

「ああ、わかった。そのことはもういいから。で、あんたは誰なんだよ。何でそんなに馴れ馴れしいんだ。」

「よくぞ聞いてくれた。私は何を隠そう、異世界のブーケ王国から来た『全世界花嫁修行連盟』の一員で、今日からあなたの家で花嫁修行をすることになった菅山^{すがやま}凛^{りん}だ。ということで今日からよろしく願います。」

（ぬぁに、今日からお、俺の、い、家にくるー？ ま、まさかこんな展開になるなんて、うひゃー、最高の気分だぜー。

だが、落ちつけ、異世界から来ただと？ どうも、そこが、胡散臭いような。もしかすると、俺みたいない人暮らしの高校生を狙った、性的詐欺かもしれないぞ。

でも、こんな可愛い子が、そんな汚いことするようには見えないし。

いや、油断は禁物だ、落ち着け俺、この子から詳しい事情を聞き出すんだ。）

そう決めた広夢は、興奮と疑いの念を隠しながら彼女に質問した。

「じゃあ、あんたが、異世界から来たって証明してくれよ。」

「わかった。これを見て。」

彼女は身分証明書と思われるものを、広夢に見せた。

広夢は、それを手にとりしばらく眺めていた。

「リン・アンツレフ・サリー・タイクサルム・ストル・コ―ゼフって、これがあんたの本名なのか？」

「うん、そうだよ。」

「だったら何で、偽名を使うんだよ。」

「それは、連盟のきまりで、ここの国の人がわかりやすいように、偽名を使わなくちゃいけないの。」

「へー、それで、全世界花嫁修行連盟ってどんなことするんだ。」

広夢は、このことが一番気になっていた。

「この連盟はね、立派な花嫁になりたい人が入る連盟なの、それで、入った人はこの世界に送られて、一人暮らしの男子高校生

をターゲットに同居をして、そこで、花嫁修行をすることになっているのよ。」

「ちよつと待てよ、いくらなんでも、出来すぎた話だろ、だいたいターゲットが一人暮らしの男子高校生なんて、そんなおいしいっ、んんっ、そんな、そんなの危ないか。」

「大丈夫、一応、最低限の護身術は身につけるし、いざとなったら、魔法を使えば良いしね。」

「魔法？」

「そう、魔法、私の住んでる国では魔法の研究がされてて、今は、習えばある程度の魔法は使えるようになるの。」

広夢はこのことをかなり疑っている。そして、広夢は全てを証明してもらったためのもとても単純な方法を思いついた。

「何か魔法やってみてよ。」

「わかった。だけど、残りの魔力が少ないからちよつとだけだよ。」

「どういうことだ。」

「魔力は寝ると補充されるの、しかもそれは夜だけだけど。だから、今日はあなたを見つけるのに使ったから、あと少ししか残ってないっていうわけ。」

「なるほどな、じゃあ、見せてください。」

「じゃあ、物を浮かす魔法、いくよ。」

すると、彼女はポケットからコインを取り出して、地面に置いた。それから彼女は、コインに手をかざして

「浮け。」と命じた。そうすると、驚くことにコインが五十センチメートルほど浮きそして落ちた。

「わあ、すげえ。本当に魔法使えるんだ。」

「まあね、でも、これが私の限界、まだ初心者で魔力も弱くて軽い物をちょっと浮かすことくらいしかできなから全然実用的じゃないんだ。」

それから、広夢はしばらく考え、そしてこう言った。

「よし、あんたのこと全部信じてやるよ。」

其の四 あの時つまりたせいだ。

「暗くなつて来たし、そろそろ帰ろうよ。」

と凜は言った。

「ああそうだな。でも何か忘れてるような。」

広夢には確かに、忘れていたことがあったが、彼はそれに気づかず、帰ることにした。

「そういや、まだ、あなたの名前を聞いてなかったけど、教えてくれる?」

「悪い悪い、すっかり、名乗るの忘れてたよ。俺は、南条広夢 よろしくな。」

「こちらこそ。」

それからしばらく、二人の間に沈黙が続いた。そして、もう広夢の家が見えたとき、凜がその沈黙を破った。

「そうだ、南条さん、ケータイ持ってるなら、メアド交換しよっか。」

「ああもちろんいいけど、広夢って呼んでくれ。」

「わかった。じゃあ、広夢、私から送信するから受信して。あと、私のことは凜って呼んで。」

「OK。」

（うひょー、女の子とメアド交換するの初めてだ。しかも、初がこんな美少女だなんて、本当に今日はいい気分だ。）

それから、二人はメールアドレスを交換した。二人はちょうど今沈もうとしている夕日に照らされ輝いている。

広夢は家に着くと、慣れた手つきで玄関の扉の鍵を開けた。

「へー、ここが広夢の家か、一人暮らしのわりには広いなあ。」

「まあな、別荘？みたいなもんかな。」

「別荘！凄いなあ。広夢の家って、もしかして金持ちなの？」

彼女は目を丸くして、広夢に聞いた。

「実はな、去年、宝くじで一億円が当たったんだ。」

「一億円！！！」

「しっ、声がでかい。あまり、人に知られたくないんだ。」

「ごめん。」

「このことは、誰にも言つなよ。」

「うん、わかった。でも、何でそんな秘密私に教えてくれたの？」

「そりゃあ、これから一緒に住む仲だし、一応しっておいてもらおうとおもつてな。」

「あとな、宝くじ買ったのは親だけど、買う場所選んだのは俺なんだぜ。」

広夢は、いかにも自分が手柄を撮ったかのように、自信満々に言った。

「思ったより運がいいんだ。」

「思ったよりつてなんだよ。」

「いや、あんなところで、こけたから、運が悪いんだと思った。」

「あときはな、お前が物凄く恐かったからだ。」

「なんだって!」

「ゴメンゴメン、そう怒るなよ。」

広夢は、ずっと気になっていたことを聞いてみようと思った。

「そういや、何で、お前は俺を選んだんだ?他にも一人暮らしの男子高校生なんてたくさんいるだろ。」

「簡単に許可してくれそうな感じだったから。」

(それは、甘いつて言ってるようにしか聞こえないんだが。)

「広夢、今日の晩御飯何がいい?」

「今日は、お前も来たばっかだし作ってくれなくていいんだ。その代わり、どっかに、食いに行こうぜ。」

「大賛成。」

彼女は、とても嬉しそうに賛成した。広夢もまた、彼女の笑顔がとても愛らしく思えた。

「そっぴゃ、俺、何か忘れてるような気がするんだ。」

「えっ、どうしたの？」

彼女は心配そうに広夢に聞いた。

広夢はリビングをひと通り見回して、テレビに目があった。そう、彼はやっと忘れていたことに気がついた。

「あー！しまった。一番肝心なこと忘れてた。」

広夢は窓ガラスが割るくらいの大きな声で叫んだ。そして、彼の胸に非常に大きな後悔の念が生まれた。

「ひゃっ、どうしたの？何か思い出した？」

凜は、彼に恐る恐る聞いた。

「今日、楽しみにしてたアニメ見れなかった。」

「なんだ、そんなことか。」

彼女は呆れたように言った。

「そんなことかとはなんだ。俺は、あのアニメ今まで一話も見逃さず見て来たんだぞ。それにもともと、こうなったのはお前のせ

いじゃないか。」

「何よ、そんなことで、人のせいにするなんて。このオタク野郎!」

凜は声を荒げた。

「何だ、この恐怖のダッシュオバサンが。」

「なんですって。」

「痛っ。」

そのとき、彼女の怒りを込めた蹴りが見事、広夢の股間に命中した。広夢は床に倒れふした。

「ふっ、そこで反省してろ!」

彼女はそう言い捨てると、リビングのソファに腰を掛けて、

「ねえ、広夢、テレビつけていい?」

と言った。

「勝つてにしろ。」

広夢は泣いているような声で答えた。

彼はこう思った。

あの時つまずいたせいだ。

其の五 レストランで。

広夢たちは今、レストランに来ている。このレストランは広夢の家から歩いて五分くらいのところにあるレストランで、広夢もよく利用しているのである。

「カレーライスしてください。」

「じゃあ、私は、刺身定食で。」

「かしこまりました。しばらくお待ちください。」

このレストランは、メニューが豊富なところがあるので人気を呼んでいる。また、大きなシャンデリアがあり、西洋の音楽が流れている。広夢はこのようなことから、オシャレなレストランだと思っ
て気に入っている。

「私、刺身食べるの初めてなんだ。」

「マジで、そっちの国とはずいぶん食文化が違っんだな。」

「この国に、食用ムカデの蒲焼きとか、大蛇のスープとか、コ

オロギのから揚げとかある？」

「何だって？、その聞くからに、ヤバそうな名前の食べ物？」

「えっ、そっちにはないの？こっちには普通にスーパーマーケットで売ってるけど。」

「んなもんあるわけあるか。考えるだけでも、吐き気がするぜ、一応聞くけどそんなのうまいのか。」

広夢は、ちょっと、凜の国の食文化が気になっていた。

「うん、特に私は食用ムカデの蒲焼きが好きかな、あれは香ばしくてすごくおいしいんだよ。」

広夢は、今とても幸せそうな顔の凜を見て、気持ち悪さが増して来た。

「そ、それってウナギみたいだな。」

「ええっ！あんな気持ち悪い物食べれんの？」

「何？どう考えたってそっちの方が気持ちわるいだろ！レストランでこんな話するの、もうよそうぜ。」

広夢は、これ以上この話を続けると本当に吐いてしまうどう考え、強制的にその話題を終了させた。

「お待たせしました。」

ウェイトレスが、二人の料理を運んで来た。

「わあ、刺身って、すごくおいしいね。」

「ああ、俺も大好きだ。」

広夢は、カレーを口に運びながら、今日こけたのはよかったのかもしれないと思った。

（ああ、女子と会話しながら二人きりで食事するなんてまるでデートしてるみたいで幸せだ。神様、あの時つまずかせてくれてどうもありがとうございます。）

広夢が、こんなことを考えて幸せな気分に入っているときだった。

「その、広夢が食べてるカレーって、カエルとミミズのひき肉シチューみたい。」

「おえ。」

広夢は抑えきれなくなってトイレに一目散に駆け込んだ。

「どうしたんだろ、大丈夫かな。」

凜は不思議そうにみていた。

「お前のせいで、本当に吐いてしまったじねえか！」

「ハハハ、広夢って面白いんだね。」

「俺は、全然面白くねえやい？」

（まったく、なんて女だ。可愛い顔して人の不幸を楽しみやがる。綺麗な薔薇にはトゲがあるってのは本当だったんだな。）

二人は、食事を終えて、帰路についた。

「今日は、本当に楽しかった。こんなに男の人と話したの初めてかも。」

「そうなんだ。そっぴやお前、彼氏とかいる？」

「うっん、そんなの生まれてから、一回も出来たことない。」

周りが暗いせいかもしれないが、広夢には彼女の表情が暗く見えた。

「おい、お前、大丈夫か？」

「あつ、ゴメン、心配かけちゃった。大丈夫、何もないから。」

「そうか、それならいいんだけど。」

「でも、これから楽しくなりそう。」

そう言つと凜は、元気に走り出した。

「広夢の家まで競争だ。」

「おい、ちょっと待てよ。」

広夢もそれに続いて走り出した。

「お前は、俺の隣の部屋を使っていから、そこで寝なよ。ベッドもあるから。」

「ありがとう、でも私はあくまでも花嫁修行のために来たんだから、妙なことしたらダメよ。」

「もししたら?。」

「お、し、お、き、するから、じゃあ、そういうことでお休み。」

「ああ、お休み。」

（くそっ、先手を撃たれたかっ!）

広夢は、悔しがりながら自分の部屋のベッドに入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9882z/>

あの時つまずいたせいだ。

2011年12月31日19時50分発行